HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	トラークル教または非政治的人間
Author(s)	伊藤, 智
Citation	独語独文学科研究年報, 9, 21-31
Issue Date	1983-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25624
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P21-31.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

トラークル教または非政治的人間

伊　藤　　智

1　本　　論

ここに一編の詩がある。素材ないし物語的骨格としては一少年の買娼の一夜、またはその顛末といえる。

呪われた者たち

1

夕闇がせまる。泉をさして老女たちがゆく。
栗の木々の暗がりで赤がひとつ笑う。
とある店からパンの香りが流れ
そして向日葵たちが垣根にしずむ。

河岸の酒場に響くのはまだなまぬるい、かすかな音。
ギターがゆるやかに琴でる。小銭がチャリン。
光輪があの小さな娘(こ)の上に落ちてくる、
彼女はガラス戸の外で待っている、やさしく、白く

おお！青い輝きを彼女はガラスの中に目覚ませる、
茨に巻きとられ、黒く、うっとりと強ばりつつも。
せむしの書記が、さざめき立つ心におののく水に
狂ったように微笑みかける。

2

晩方ペストが彼女の青い着物を縁どり
しずかに陰気な客がドアを閉める。

窓からは楓の黒い重荷が降りてくる。
少年が彼女の手のなかに額をうずめる。

しばしば彼女のまぶたはわずらわしそうに、重く閉じられる。
少年の両手が彼女の髪の中を流れてゆくと
彼の涙は熱く澄み、落ちる
黒くうつろな彼女の眼窩に。

猩紅色の蛇たちの巣が彼女のほり起こされた胎内で
もっさりと立ちあがる。
彼女の両腕が死に果てたものを解きはなす、
彼を絨毯の悲しみが縁どっている。

3

茶色の庭に鐘の音がひびいてくる。
栗の木々たちの暗がりに青がひとつ漂う、
見知らぬ女の甘いマントが。
木犀草の香り。そして燃えあがる悪の

感情。湿った額は冷たく白く
汚物の上にうつむき、そこで鼠がほり返している、
星たちの緋の輝きになま温かく洗われて。
庭ではりんごがいくつもぽったりとやわらかく落ちる。

夜は黒い。温い(フェーン)夜風が気味わるく
すずろに歩む少年の白い寝巻をふくらませ、
そして音もなく死んだ女の手が彼の口にすべり込む。
ソーニャがやさしく美しく微笑む。

これは、その骨格さえ知れば、霧の中からやにわに具体像を彷彿させるところがある、トラークルの詩では例外的な一編であるが、鍵辞(キーワード)のソーニャは謎解きの鍵としておかれているのではない。また判じ絵、隠し絵の類でもあるまい。詩人はだれかを煙にまく意図など持ち合わせていないと思

われるが、個々の形象、文単位が切れ切れに、だが映り換わるのではなく、据えられた後立ちつくすような語り口に乗せられるため、連続が見過されることがあるかも知れない。一方、各人が清濁併せ持つように地上の所業が清濁の二面を有するとするならば、詩人の眼が向けられるのはそのきよらかな一面である。濁を素朴な濁として描かないのだ。ひとりソーニャのみが浄らかなのではない。少年の触れた世界が、また少年そのひとが浄らかなのである。彼は母を待つ少女を見過さない。だが、義憤をおぼえるというのでもない。すべてが宿命を受け容れ、従順であるように思われる。逆に詩人の素朴な意味での政治性の欠如を印象づけられる。人間について政治的の語を用いる際、全体社会に対して意識が開かれ、より高次の集団的意志決定に参与することを第一の目的とする傾向を云うとともに、政治的人物とは当面の問題を選択可能な形に調停しつつ妥協を計ることに有能な人物と云いうるような一般論を含め、同時に、後に明らかになるように、集団のカリスマ支配、目的至上主義的行動を能くする人物をも含ませた。まずは伝記的事実を端緒に考察を進めてみよう。

さて Georgの父Tobias は鉄鋼商を営み、しかも豪商と云ってよい程の地位と信用を築いたひとであった。母 Maria は後妻、 Georg は六人兄弟の4番目、 Georg との関係で重要なMargareteは末っ子である。この母は音楽性豊かだが、子育てには興味がなく偏執的な骨董趣味に没入した婦人とまずは一括できる。子女の養育にたずさわったのは、熱心なカトリック信者で、フランス的教養豊かな Fräulein Boring で、 Georg はよくなつき、彼にフランス文学への扉を開いたのがこの婦人とされる。ギムナージウムに入ってからの Georg は成績は平凡、友人との間では変わり者でとおっていた。それがドストイェフスキーとの出会いによって（Buschbeck）、[1] もちろん単なる早熟と割りきってもよいのであるが、妙に大人びた落ちこぼれ方をする。友人間ではWeltbild をもっぱら話題とし、それに対する渇望が強いるかのような、酒、ニコチン、女郎屋通い、クロロホルム……。第7学年で放校。

気になることと気にならないことを少し区別してみよう。母の性格は多少常軌をはずれているが、富裕な市民階級の家庭にあってはえてしてあり勝ちな例である。ボーリングの手による養育環境はその立場として、子供に対しておっとり構えられる実母よりはおせっかいの度が過ぎたかも知れないがほぼ万全、後年の彼の本格的な自己形成(?)に特別な影を落としたとも思えない。ドストイェフスキー、ラムボー、ボードレール等はたしかに強烈な毒を含むが、その毒は社会あるいは実人生に対するひとりよがり（Weltbild ）をつくり出すようなまわり方をするにとどまる。トラークルの場合は毒が血への呪いを目覚ませてしまう。ひとりよがりの世界像が市民（あるいは時代）的良識、良俗に対する反逆であるならば、彼の場合自身の血に対する反逆が加わる。これは不可解でありながら説明もつく。流れ込んでくる毒はもちろん圧倒的でありながら、なんだこの程度のことかとせせら笑う自身の悪魔性である。

〔……〕
野性の一族の
暗い愛、
彼らから昼が黄金の馬車に乗り、音たてながら去ってゆく。
静かな夜。

暗闇の樅の木立の下
二匹の狼が血をまぜあわせた
石のように抱きあって。金色のものが一つ
雲となって小径に消えた、
幼などきの忍耐と沈黙。
〔……〕

（詩「受難」〝Passion〟）

トラークルと妹グレーテとの肉体関係（インツエスト）を想定する際の根拠にされる詩句であるが、あるいはこのような事実が毒をあおりながらそれに持ちこたえる自身の毒を強めていったのかも知れない。血への反逆は自らがその一族の一員であるという根本的な矛盾を抱えている訳で、通常その矛盾が健やかな居直りとなって深刻な精神の危機を招くことはない。しかし自身が呪われた血を実証してしまったとき、血への、ひょっとすると逃げ道があったかも知れぬ呪いは、自分一身へと、精確には一身同体となってしまった共犯者も含めた自身へと一気に矛先を変える。呪われた血とは今や自身に他ならず、これはもう血からの分離である。分離者の性は孤独、ただし彼のみが自身の受難を人類の受難にまで飛躍、拡大することができる。

わが父がからくも貧を脱せしころそだちてわれは嘲笑われ易き　（岡井隆）

岡井は戦後の歌人であるが、ここに見えるようなコムプレックスが、例えば日本の緒期の社会主義運動にあっては、参加の契機たり得たことは亀井勝一郎を挙げるまでもない。健やかな政治性と云うべきか。そしてトラークルにあってこの健やかな政治性を阻害するものを考えるとき、ウィーンならいざしらず、ザルツブルクという地方都市の古色蒼然たる精神風土を無視しえないにせよ、自身の血へのこだわり、逃げ道のなくなった自身の血のネガティブな特殊性へのこだわりは重大である。このこだわりの深化が先の分離を促すのであるが、その際の彼の心情は「孤独者」のみにそなわる普遍に領される。イエスに譬えるならば、布教活動に入ってからの肉身感情の喪失である。

（マルコ伝、3－31～34）これは同時に教祖トラークルの誕生であり、非政治的人間トラークルの完成であるが、このような心情構造が彼の詩を規定するのであり、彼の日常を規定しないことは言うまでもない。トラークルの自然の美しさは並たいていでない孤独者にだけ浸みわたる自然のなぐさめであろう。

ところで人類の受難はトラークル教では人類の血の汚れから発することになり、この見方は、財貨や地位や特権がひとを汚すというテーゼの対蹠を占めるが、同時に聖書的原罪を受け継ぐのみならず、「苦しみそのものが幸福であり、敗残と柔弱そのものが幸福であるというような心情のマゾヒズム（吉本隆明、傍点原文）」[2]にも通じる新約・イエス的な、いわば転倒された幸福論の中核を濃密に受け継ぐのである。ただしトラークルの苦悩教のこのような拡大過程ないし成長の過程は発端や完成がないのを自明としなければならない。しかし彼が自身の苦悩と破滅の予感におののきながら、頭（こうべ）をたれるという従順の身振りで自己救済の確信を逆に深めていく姿勢 ── をいつしか脱し、多の苦悩への接近と同化の姿勢をとり入れていくことも確かである。次に二例を挙げる。

古い記念帖に

くり返しおまえは帰ってくる、憂愁よ、
おお、孤独な魂の優しいおもい。
最後に黄金の一日が燃えあがる。

謙虚に耐えしのぶ者がいたみへと身をかがめる
階音と柔らかな狂気を響かせながら。
ごらん！もう暮れてきた。

また夜が帰ってくる、すると定めある者が嘆き
さらにもう一人の定めあるものが苦しみをともにする。

秋の星々の下でおののきながら
年ごとに深く頭（こうべ）は傾いてゆく。　（1912秋）

捕われた黒つぐみの歌

ルートヴィヒ・フォン・フィッカーに

緑の枝のなかの暗い息。
青い花々が孤独者の顔(かんばせ)のまわりに
オリーブの下、いまは死にゆく
黄金の歩みのまわりに漂う。
夜が酔った翼で舞いあがる。
こんなにひそかに謙虚の思いが血を流す、
花咲く茨からゆっくりと滴る露。
光なす腕の憐れみが
はりさけるひとつの心を抱きとる。　　（1914春）

詩語(ことば)の運びそのものが促すのであろうが、『古い記念帖に』の方がどことなく白々しい印象を与える。苦悩の密度が後詩ではいっそう深まっている。前詩では『おののきながら』も自己救済の確信が仄見えるのに対し、後詩ではイエスのようなひとに『抱きとられ』ながら、救いがないような悲痛さが感じられる。『ひとつの心』がそれだけ拡がりを増す。

イエスは治癒活動によって霊能を示し、当時のユダヤ社会が抱えていた階級的宗派分裂と遺棄された民衆という構造の矛盾と愚昧に対してたち上ったカリスマ的師(ラビ)、宗教改革者であったが、周知のように布教は政教一致の社会では民衆扇動と見做され、政治犯として処刑された。一方トラークルが、悩めるイエスとイエス教の信奉者であったことに疑問の余地はなかろう。彼はイエス教の危機の時代に、彼なりの本源のイエス像とイエス教を内に育てた。その点ではルターと同列である。≫Er war wohl Martin Luther.（Else Lasker-Schüler）[3]≪ あるいはカトリックの海に浮かぶプロテスタントの島のようなトラークル家の宗教がそうさせたのかも知れない。しかしこのことは、彼がかって存在したであろう無数の、既成教会と彼なりのイエスの懸隔に心悩ませたイエス教徒と変わりないと云うに等しい。彼らは語録を残さなかったにすぎない。翻ってトラークルに「わが邪宗」の意識があったかどうかの詮議は無用である、どんな政治的人間でも内にラスコーリニコフとソーニャを飼い、聖と悪、聖と俗の相克を生きているとするならば。我々は各々の「わが邪宗」に照らしてトラークル教を知ることができる。

ではトラークル教は彼の詩にとって何であったか。おそらく愚問である。詩句がそのまま託宣なのだ。≫Seine Gedichte：Singende Thesen.（Else Lasker-Schüler）[4]≪ すると彼と詩語(ことば)との関係はシャーマン的共同体の占い師の場合と等しいことになってしまう。あるいはそうなのかも知れぬが、邪宗に立ち帰って、彼の詩句が神託的な響きを湛えてしまうと改めよう。その際詩人が詩において読者に押しつけるものは現世の悲哀、苦悩であり、彼はその傷み分けを要求している。傷み分けには、資質を問う以前の仁義があり、それは、喚起される世界以上に自身が血を

流すことと云える。本来苦悩自体が自浄力を持ち、傷み分けはその分与の行為であるが故に、詩人がなすのはしたがって浄める行為、対象世界の聖化の儀式である。イエスの所業に譬えるならば洗礼を意味しよう。それはまた罪の遍在を意味する。そして詩語においては、対象（つまり喚起された）世界は限りなく詩にのべられたことばに近い筈である。トラークルの詩語（ことば）の深さは苦悩教のこのような儀式を経てきたことによる。近親相姦が彼のことばの深さの因をなすような言い方は、茎のない花のような短絡である。

少年エーリスに

エーリスよ、つぐみが黒い森で呼ぶとき、
これはおまえの没落なのだ。
おまえの口唇は青い岩場の泉の冷気を飲む。

おまえの額がかすかに血を流すとき、捨てよ
太古の伝説や
鳥の飛行の暗い意味を。

おまえはしかし、やわらかな足どりで
紫の葡萄がたわわに実る夜の中へと歩み込む、
そして青の中で、いっそう美しく両手を動かす。

茨の茂みが響くと、
そこにはおまえの月のような眼がある。
おお、なんと久しいことか、エーリスよ、おまえが死んで。

おまえのからだは一本のヒアシンス
その中へ修道僧がひとり蠟のような指を浸す。
ぼくらの沈黙はひとつの黒い洞窟、

そこから時おりやさしい獣が出てきて
ゆっくりと重いまぶたをふせる。
おまえのこめかみには黒い露のしずくが滴る、

墜(お)ちた星たちの最後の黄金が。

この詩で語られているのもまた儀式である。詩人自らの分身であり、自分の内の最も清浄なるもの、あるいは彼が知るところの最も親しい霊的存在が罰を受ける。彼はヒアキントゥスの生まれ変わりと呼ばれる、彼の自己愛の象徴エーリスをも一度は殺してしまう。だが一方では、在りし日の清浄無垢な自分を恋慕い、運命の苛酷さを嘆く哀悼(エレギー)の歌でもある。この自己愛のきわまりが生み出す比類なき美しさは、どこか中原中也を思い出させるところがある。ところでこの詩に限らずトラークルの静的な宗教画の中で、唯一自由な呼吸をしていることの多い「獣」は何らかの隠喩または象徴であろうか。

森の縁が青い獣たちを閉じこめる　　（詩「村で」〝Im Dorf〟）

暗い秋が果実と豊かさをいっぱいにおとずれる、
〔……〕
赤い森で獣の群れが迷う。
〔……〕
極かすかに夕べの青い翼が
かわらぶきの屋根に、黒い大地に、触れる。　　（詩「孤独者の秋」〝Der Herbst des Einsamen〟　傍点筆者）

トラークルの青は一方では霊性を表わす。したがって青の出現は霊的時間、霊的世界のおとずれを意味しようが、他方青は最もトラークル的な、あるいは最も彼にとって好ましい時である、秋の澄みわたる黄昏時の色であり、そのとき彼の全感覚が感受するもののエキスとでも云えよう。

青の出現は美学的現象である以前に、詩人にとっての霊的時間、すなわち詩作にふさわしい時の到来を意味し、彼の浄めの儀式が成り立つ。つまり彼はその時遍在する罪に向き合うのであるが、『少年エーリスに』の中の獣（Tier）のように、そこで自由に呼吸し、ちょこちょこ動き、かつ従順の身振りで詩人に合図するやわらかなものとは何だろうか。それは罪の縁を越え出た意志的なもの＝悪である。『呪われた者たち』の第三節で、少年の心に悪の感情がめらめら燃えるくだりがあるが、罪の意識におそわれながら、彼が「もうよそう」ではなく「それでもやっぱりまた行くぞ」と決意する様が鮮やかである。ここに我々はトラークルにおける罪（の意識）と悪（の感情）の分界を知る。イエスが「外より人(ひと)に入りて、人を汚し得るものなし、然れど人より出づるものは、これ人を汚すなり〔……〕それ内より、人の心より、悪しき念(おもひ)いづ、即(すなわ)ち淫行・竊盗(ぬすみ)・殺人(ひとごろし)・姦淫・

慳貪・邪曲・詭計・好色・嫉妬・誹謗・傲慢・愚痴。すべてこれらの悪しき事は内より出でて人を汚すなり（マルコ伝7－15～23）」と言うときの悪しき念が住まうのがトラークルの森であろう。しかしそのような念に発する行為はもちろんそれだけで悪であり、罪であるのだが、悪の感情というときには特殊トラークル的な、罪の自覚の上に繰り返される悪行の意味と考えられる。

さて、『孤独者の秋』の赤い森もまた悪を犯す霊の住まうところである。『少年エーリスに』における獣は詩的時間のおとずれとともに封印を解かれて外界にさまよい出た。浄めの時に、悪の立入りも許されているということである。その意義については後述する。整理すると、森に住むのは霊である。だが森は封された霊たちの境域であり、境の神に護られた塞の河原に近似している。人里に行き倒れ、人里で恥辱にまみれた者たちの、人里の罪が追いやった者たちの霊が住むところであり、裏返せば罪の捨場である。そしてトラークルにとって、詩作とは彼におとずれる霊的時間に行われる森との交信である。トラークルの青の底深さはこのような彼の、エーリスと彼との関係にも似た、自我分裂的様相を含んだ詩作のメカニズムに基づくと考えられる。とはいえ彼が彼の霊的時間に向き合うものは、やさしい悪（詩の中では、やさしい獣）ではなく、遍在する罪であることも明瞭であろう。ここに彼の詩の登場人物に映されている罪の相を二、三挙げると、

女：『呪われた者たち』第一節の少女は今の今まで無垢であったと思われるが、光輪（聖なる光）に触れて、人里の実相、自分が待っていることの意味を知る。『若い下女』の中の、肉欲の誘惑に敗け、産褥のままに死ぬ若い下女がこの少女の未来であるかも知れない。その他母たちや老婆たちは大旨おだやかであり、罪と罰との因果応報を既に完結しているかのように描かれる。

修道僧：僧衣が罪の自覚の印、ないしは自戒の誓いを意味するのはもちろんとしても、すすんで自身を罰しようとする情熱が見あたらない。発心の跡が見あたらない。ならば発心なき僧職か。

癩者：業病であり、罪の顕在を示す。その完璧な苦悩により、時に霊能を得るが、自身の運命さえ予知しえない。「鳥の飛行の乱れたしるしを読む癩者たち、彼らはおそらく、夜になれば腐ってゆく。」（詩「悪の夢」〃 Traum des Bösen 〃）

ひと皆罪を犯し、悪業に身を染める。これをやりきれぬ人間の性と捉えるならば、必罰の掟を護持し、その上にわが身を持すしかない。これをいまひとつ積極的に、つまり正しい人性であると捉えるとき、「正直ものがバカを見ない社会ができたらたいへんだ」[5]という教訓が見えてくる。因果の逆立ちである。トラークルが描かなかった世界、それ故浄めなかった人々を考えてみよう。それは明らかに聖に対する俗の世界、俗人の筈である。それは、どういう訳か罪の念に苦しまぬ、逆立した必罰の論理の上で安穏としている人々を意味しよう。換言すれば、我に罰なし、故に罪なしと言ってはばからぬ現代のパリサイ人である。ところで前述のように、悪とは罪の自覚に打ち勝ってさらに罪を重ねようとする意志、罪罰の因果応報の掟に対する挑戦であった。トラークルにとっては、このような人々に対する内なる力として、平たく云えば懐刀として悪の意義と効用があった

と思われる、何よりも自身の悪の効用が。

このようなひと各々にまつわる罪と悪の重層は「業」と呼んで差しつかえないと思われる。イエスのインテリ批判『學者らに心せよ、彼らは長き衣を著て歩むこと、市場にての敬禮、會堂の上座、饗宴の上席を好み、また寡婦らの家を呑み、外見をつくりて長き祈をなす。その受くる審判は更に嚴しからん』（マルコ伝12－38～39）は最大のライバルであるパリサイ人の屋台骨たる学者階級の生活態度批判に終っているが、もちろんここにはすり替えがある。一方トラークルには知によって業を払うことはできないという素朴な思い定め、ないしは悪の論理が想定できる。

トラークル的な悪の優しさに身を置いて、素朴な異教徒の眼からイエスを見れば、福音書に見られるような調子でシャーシャーと「悔い改めよ」と叫ぶイエスは、そこにかぶせられている、苛酷な思想闘争を生き抜いてきた原始キリスト教指導者たちの骨髄の恨みを認めるとしても、気違い沙汰である。カリスマの師、政治的人間イエスの真面目であろう。そしてこれがトラークル教とイエス教の根本的相違であり、非政治的人間トラークルの真面目でもある。悪の認識において清浄の何たるかを知り、淫の認識において童貞の何たるかを知った彼が非政治的に説いた教理は、傷ましい現世における従容の姿勢であり、救いは彼独得の、しかしひと各々に存する優しい悪、従容からのたまさかの解放としての悪であろうが、同時にそのような彼の姿勢は、自ら描かなかった世界を支配する人間的鈍感に対する満身の憎悪に支えられている。

ところで非政治性とはつき詰めれば自己完結性ということになる。彼の詩語は結局のところ彼自身の救済のためにのみ在ると云える。にも拘らず現前するトラークル教の引力を認めなければならない。「個人的な感動や体験は、それらがまさに美的に形成される、され方の明細によって普遍に参与するとき、はじめて芸術的になる（Adorno）」[6]苦であり、これがトラークル教を想定する理由である。

2　結　　論

トラークルの苦悩教は純粋でありすぎて、何らかの思想へと至る葛藤が欠落している。非政治性とはあまりに根深い幼児性と言い換えられる。それに発する悲しみの深さが彼の詩のなぐさめと云える。

注

1) Basil, Otto : Trakl. Rowohlt Taschenbuch Verlag Hamburg 1965. S. 45.

2) 吉本隆明：「マチウ書試論」著作集第4巻、勁草書房 東京 1969.83頁

3) Basil, Otto : ibid. S. 163.

4) 3) に同じ

5) 山本七平：「聖書の常識」講談社、東京 1980.184頁

6) Adorno, Theodor W. : Rede über Lyrik und Gesellschaft. Noten zur Literatur I. Suhrkamp Verlag Frankfurt a. M. 1958. S. 74.

テ キ ス ト

Trakl, Georg : Dichtung und Briefe. Historisch－Kritische Ausgabe, 2 Bde. Otto Müller Verlag Salzburg 1969.

参 考 文 献

- Busil, Otto : Trakl. Rowohlt Taschenbuch Verlag Hamburg 1965.
- Schneditz, Wolfgang hrsg. : Georg Trakl Nachlaß und Biographie. Otto Müller Verlag Salzburg 1949.
- Adorno, Theodor W. : Noten zur Literatur I. Suhrkamp Verlag Frankfurt a. M. 1958.
- 吉本隆明：「マチウ書試論」著作集第4巻、勁草書房 東京 1969.
- 山本七平：「聖書の常識」講談社 東京 1980.
- 山谷省吾他：「新約聖書略解」日本基督教団出版局 東京 1955.
- 浅野順一編：「キリスト教概論」創文社 東京 1966.
- C. トレモンタン著，西村俊明訳：「ヘブル思想の特質」創文社 東京 1963.